

國學院大學学術情報リポジトリ

19世紀なかばトゥール＝エ＝ロワール地方の農業協会について : 1853年の報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-21 キーワード (Ja): 19世紀フランス, トゥール地方, アンドル＝エ＝ロワール (Indre et Loire) 県, 農業協会, 人材戦略 キーワード (En): 作成者: 佐藤, 崇章, 尾崎, 麻弥子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001589

19 世紀なかばトゥーレーヌ地方の農業協会について － 1853 年の報告 －

■ 佐藤 崇章・尾崎 麻弥子

▶ 要 約

フランス農業協会はアンシアン・レジーム期に当時技術的に未熟であったフランス農業の奨励のために設立され、革命期の中断を経て 19 世紀を通じてフランス農業の発展を後押ししてきた。本稿は、1853 年の北フランス、トゥールの農業協会の報告書の紹介により、具体的にどのような農業奨励がおこなわれてきたかを明らかにする。当時のトゥーレーヌ地方は工業化の成果が著しく、そうした経済発展のほうが評価されている。しかしその一方でこのような農業協会による報告書は細かい農業への提案について触れられている。具体的には松やコナラの植林による荒地の開墾に関する提案、農民学校で植林とその費用と効果に関する授業がおこなわれたこと、家畜飼育のための飼料の増産方法、実施された褒賞制度とどのような場合褒賞が得られたか、という内容であった。こうした史料の紹介を通して、アンドル＝エ＝ロワール県の当時の農業の実態と、どのように改善の余地があるかと考えられていたかということをはかるとともに、農業協会の役割と当局の農業に対する意識の一端を明らかにする。

▶ キーワード

19 世紀フランス トゥーレーヌ地方 アンドル＝エ＝ロワール (Indre et Loire) 県 農業協会

目次

はじめに

第 1 章 アンドル＝エ＝ロワール県の農業－時代背景と農業協会

第 2 章 史料紹介

I 開墾

II 土地の活用に関するより良い指導

III 飼料の耕作

IV トゥーレーヌ地方に関係のある実践的な農業の問題に関する概要

おわりに

参考文献

はじめに

本稿は、1853年のトゥール（アンドル＝エ＝ロワール県の県庁所在地）農業協会の報告書の分析を通じて、当時の北フランス、ロワール地方、とりわけアンドル＝エ＝ロワール県の農業の実態を明らかにするとともに、当時のフランス当局の農業奨励の内容について考察し、政府の農業に対する政策について検討することを目的としている。

18世紀のフランス経済は停滞しており、農業に関してもエンクロージャーが進展していた英国と比べて目覚ましい進歩は見られないといわれてきた¹。アーサー・ヤングの『フランス紀行』²においても、1789年ごろのフランス農業の実践は、近代化という側面に関しては決して発展していなかったと指摘されている。また、フランスの農業主義者たちも、同様の状態を指摘していたが、そのような中でも、彼らは、革命前のフランスでは、アンシアン・レジームの厳しい税制及び中央集権的な体制に由来する農業への政治権力の介入、もしくは支援があったことについて注目している³。時代は1789年より少しさかのぼるが、1760年にトゥールで初めて設立された農業協会も、このような状況の中で生まれたものと考えられる。

18世紀から始まり、革命期の中断を経て、農業協会は、常に農業技術の奨励を続けてきた。ナポレオンは、18世紀の農業協会について、「農業協会は政府の計画を熱心に支援し、すぐれた技術を普及させている」と立法院で発言している⁴。その役割は、主に新しい農業方法の伝達・普及を目指すものであった。各時代において、その評価を知らしめた農業協会であるが、その内容は、地域や時代が異なれば、特徴が異なる。その中でもトゥールの協会は、1760年以降全国的規模のものとしては最初に設立され、膨大な借金をしても続いていた。

19世紀になると、特にイギリスとの関係の中で北フランス農業の豊かさが徐々に国際的に評価されてくるようになる。19世紀初頭にはすでにロワール地方の菜園の質の良さが英国やパリでよい評判をもっていたことが記述されている。また、当時フランスで盛んになりつつあったガストロノミーの高名な料理人が新しい料理のアイデアを出し、農業に刺激を与えていたという。1846年には、『パリ・ア・ターブル』という雑誌において、トゥーレーヌ地方・メーヌの野菜市場の魅力が書き記されている。19世紀半ばには、万国博覧会でポワトゥー周辺のワイン畑や家畜飼育が高い評価を受けることとなった⁵。こうした状況の中、博覧会への支援や、地域的な品評会などの運営において各種の公的機関の支援はますます重要なものとなっていった⁶。『西洋農業の変貌』⁷を著したデイビット・

グリッグも、フランス 19 世紀の農業協会の役割を高く評価している。

本稿では、こうした時代背景を踏まえ、1853 年のトゥール農業協会の報告書を紹介・分析することにより、当時の農業協会の役割の一端について検討したい⁸。

先行研究

フランス農業に関する先行研究はあまりに膨大なため、ここでは、本稿に直接関係する先行研究についてのみ述べることとする。

対象地域の農業についての先行研究としては、ムノーによる『トゥーレーヌ農業史』がある。フランス史は基本的に地方史が非常に盛んであり、それぞれの特有の歴史についての研究を多数残している。ムノーによる研究は、そのような地方史の代表的な作品である。ムノーは、その序文において、近年、農業に関する研究が軽んじられていたことを指摘していた。そして、古代から 20 世紀前半までのトゥーレーヌ地方の農業の実態についてあきらかにしようとした。他のトゥーレーヌ地方史の研究は、19 世紀については工業化が大きく取り上げられており、農業についてあまり触れられていないものが多いのに対して、農業のみを対象にしたムノーの著書は、当時の農業状況について、細かい事情を知ることができる貴重な研究であるといえる⁹。ただし、農業協会についてはあまり触れられていなかった。

一方、近い地域における農業協会に関する研究としては、吉田清一によるものと湯村武人によるものがある。吉田清一は、「19 世紀初頭のフランスにおける農業問題」¹⁰において、農業協会の報告をもとに、19 世紀初頭に、栽培牧草地の創設、飼料の改良、輪作形式の変更、農民の富裕化などにより、フランス農業は進歩したと指摘している。湯村武人は、「19 世紀フランスにおけるロワール＝エ＝シェル県農村の動向」および、「19 世紀ヨーロッパ農村における大規模経営の減少と中規模経営の増加について：フランスを中心に」があるが、本稿対象のアンドル＝エ＝ロワール県は対象とされていない¹¹。

研究対象史料

本稿においては、「ミナンゴアン (Minangoin) による 1853 年の奨励金のための検討委員会の名におけるアンドル＝エ＝ロワール (Indre et Loire) 県の農業協会に示された報告」¹²という史料を検討する。この史料を分析することで、19 世紀半ばまでのトゥーレーヌ地方の農業協会がどのような活動をしていたか示したい。

本稿構成としては、第 1 章で 19 世紀を中心としたフランス・トゥーレーヌ地方の地理や農業の特徴と農業協会について簡潔に述べ、第 2 章では対象史料の各章での内容を紹介・分析する。おわりにで、対象史料の意義と農業協会の役割についてまとめる。

第1章 アンドル＝エ＝ロワール県の農業－時代背景と農業協会

本章においては、本稿対象史料の時代および地域的背景について概観する。はじめに県庁所在地であるトゥールの19世紀の政治・経済状況を概観し、周辺農村の状況と農業協会について簡潔に述べる。

第1節 19世紀都市トゥールの特徴

はじめに、本稿対象時期における都市トゥールの状況を概観する。アンドル＝エ＝ロワール県の県庁所在地である都市トゥールは北側にロワール川が流れており、橋で南側とつながっている。市庁舎や教会、市場などは南側の川沿いにある。

都市トゥールは七月王政時代、1840年代前半から半ばまでは、鉄道の敷設や最新式の工場によってかなりの経済的発展を遂げた。鉄道駅は市庁舎などよりさらに南に設置されていた。しかし、こうした繁栄は1846年からの経済危機と、1848年から1851年までの政治的危機によって停止した¹³。

1846年の経済危機前年の段階では収穫は平均的だったが、1846年は乾燥による収穫の激減により、パンの値段が高騰し、ジャガイモの価格はさらに高騰した。10月にはロワール川が増水した。当局はパンの価格を下げるための補助をおこなったが、経済危機は収束せず、そのまま二月革命の政治的混乱へとつながった¹⁴。

第2節 トゥーレーヌ地方の農業

トゥーレーヌ地方の農業は、地中海地方やアルプス地方と比較しても、決して小麦の生産にとって不利ではなかったと一般的には考えられる。しかし、実際には、多様な耕作が特徴であった。フランス蕪の栽培や菜園、ハーブなど（コリアンダー、セナ、アニスなど）の栽培など、多様な耕作がおこなわれていた。また、赤ワインや白ワイン用のブドウ畑もあった。上記に述べたようにジャガイモの栽培もあったが、ほかにも蕎麦やインゲン豆などの栽培もされていた¹⁵。

トゥーレーヌ地方の人口は1851年から1901年までにほぼ倍となった。これはもちろん工業化によるトゥールの都市人口の増加によるものが大きいと考えられるが、そうした都市人口を支えるための周辺農業の役割がより重要となったであろうということが考えられる¹⁶。

第3節 農業協会

ナポレオンが農業協会の指導を高く評価していたことはすでに述べたが、総裁政府期に再建された協会は1808年に52を数えるほどに増えた。指導の主な内容は人口牧草地の普及、長柄鎌の使用、甜菜や茜、大青等の栽培、ジャガイモ生産などの指導であり、その役割は決して小さなものではなかった。しかし、この時期にはフランス農業は未熟な部分が残っており、必ずしも指導通りの成果があったとはいえなかった¹⁷。

トゥールの農業協会については、1760年代に作られた最初のものであるということ以外、パリその他の農業協会との目立った違いについてはまだ不明な点が多い。以下の史料紹介を通じて、その一端について知ることができれば幸いである。

第2章 史料紹介

本報告書はI～IVの部分に分けられている。Iは開墾についての提案、IIは土地の改良に関する資料、おもに農業学校での授業の内容について、IIIは家畜を育てるための飼料の栽培について、IVは奨励の褒賞について述べられている。大きく分けると、I、IIIは耕作自体について、II、IVは人材育成について述べられている。

以下、I～IVの内容の概要を紹介する。

I 開墾

農業協会に所属する会員は、ほとんど農業を実際に行っていなかった地主、土地貴族であった。しかし、地主であり、弁護士であったベルトン氏は、実際に土地を耕していた。そして、植林のやり方を変えようとしていた¹⁸。

ベルトン氏は、ヒース¹⁹で覆われたド・ロシュのジロンヌリ（Gironnerie）の土地を中央から開拓した。その土地は不毛な土地だったが、彼の指示により、果実のなる木も、松の木も、飼料用のソラマメも、シャジクソウも植えられた。結果として主にその植林が広げられた事が記されている。

また他のヒースの土地の増産も問題となった。主に、ヒースの土地であったシャンシュブリエーの土地は、松、コナラの植林、マカラス麦の栽培によって広がった。

1853年という時代において、ベルトン氏は、これらの荒れ地をまだまだ開拓する必要

性を感じていた²⁰。

Ⅱ 土地の活用に関するより良い指導

主に、ここでは、ユーボーディエール（Hubeaudières）の農業学校で、生徒に農業のやり方を教えていた事について書かれている。そこでは、農業のやり方を教えつつ、費用を計算し、具体的な数字から効果の説明について書かれている。

例えば、具体的に紹介されている数字としては以下のようなものである。

1. 焼き畑にする、焼く、灰を広げる、土塊を砕くための費用	150 フラン
2. どんぐりを播く費用、犁で埋める費用	10 フラン
3. どんぐり 250 リットルの収穫のための費用	10 フラン
4. フランスカイガンショウ（松の一種）の種 25 キロ分の費用	10 フラン
	計 180 フラン

別の例としては松の種、コナラの植林、マカラス麦を播いて、松を間伐して収入を得て、費用に対して効果が得られる。

伐採又間伐は、15年事に行う。最初の伐採又間伐は、ヘクタールあたり約750 ピエ（pieds）²¹の松を残して、100 から 150 フランの総生産高を得る。30年後に、コナラの輪伐用樹林の第2回目の伐採の総生産高は、新たな間伐を行い、ヘクタールあたり350 から400 ピエ残すと、150 から 200 フランにのぼる。45年後に、3回目の輪伐用樹林の伐採の総生産高は、新たな間伐を行い、1ヘクタールあたり、150 ピエ残すと、200 から 300 フランにのぼる。

輪伐用樹林は、15年ごとに整備され、1ピエについて、ヘクタールあたり250 から 300 フランの市価をもつ。

こうした事に対して土地測量が教育的効果をもっている。若い見習いは、初等の教育を終えて、土地測量の実践を学ぶことが示されている²²。その試験農場を含む農学校と学校長は、褒賞に値すると書かれている。

農業のための学校を作るという事は、農業の実践を教える事である。こういった試みは、19世紀の半ば以前にも行われ、ブルジェラの獣医学校や試験農場など施設を作る事で、農業の実践を学ぶ若者を育てた。そして、教養のある農業者を連れてきて、農業をさせる

事も合理的であり、地主に利益をもたらそうとした。

このような試みがなされたが、人材の育成をしてもなかなか成長には結びつかなかった。しかし、人材育成というものはすぐに効果が現れないのは当然のことと考えられるため、このような実践それ自体は決して無視できるものではないのではないかと考えられる。

Ⅲ 飼い葉の耕作

穀物から取れる飼い葉は、ますます増えて、家畜を殖やす。橋の開発によって、その橋の下に水肥ができる。主に、水肥は、夏の暑い間、それに不足している湿気を堆肥に戻すため、ポンプによって引き出される。結局、この開発は、寝わらのための土地や泥灰土の使用について、農業の実践として評価される事について書かれている。

1854年のミナンゴアの報告で、飼い葉については、内容は異なるが扱われていた。ここで、飼い葉、水肥、寝わらのための土地や泥灰土について取り上げたのは、家畜に関わる周辺の事について筆者が重要であるととらえたと考えられる。

飼い葉が増えれば、家畜の食料が増え、家畜の数も増える。その家畜が糞をすれば、その土地が肥沃になる²³。家畜の飼い葉を考えるのも、農業実践上の大切な事であった。

Ⅳ トゥーレーヌ地方に関する実践的な農業の問題について

マダム・コラ・ミレ (Cora Millet) は、コンクールに関して2つのメモワール (報告書) を示した。農業協会では、コンクールを行い、そこで競わせて、賞を授与することをおこなった。その中で、金メダルを受賞したのは4人だけであった。

第1の報告の題材は、飼い葉を増やす出費がなく、開発中の堆肥を使って、最も不毛な土地に持続的な飼い葉を作る事について助言した。

第2のメモワールは、このテーマについてより実践的な内容に触れられていた。その詳細については、土で汚れた寝わらにわらを取り替える事を望む耕作者達に、良い質の堆肥を作る事を目的とし、動物を清潔な状態に維持するための方法を示している。1854年のミナンゴアの報告では、飼い葉については言及があったが、堆肥については、取り上げられなかったが、マダム・コラ・ミレは、2つのメモワールで堆肥についての重要性を指摘しており、この部分が特徴的であった。

賞の詳細については、以下のようなものである。

【マダム・コラ・ミレのメモワールにある、コンクールの賞の分配の表示】

I 開墾に関して

金メダル レネ・ド・シャンシュブリエ男爵に

金メダル ベルトン・ド・ロッシュ氏に

II より良い指導に関して

金メダル ダヴィリユイ氏、ユーボーディエールの試験農場の学校長

銀メダルと100フラン 最高の生徒にメダル召還 イスレットの城における ドピュイ・ボンヌメール氏に そしてパルカイ・メスライのジャン・トゥラス氏に

III 飼い葉の耕作に関して

金メダル ポンの城におけるミレ・フィス氏

IV 動物の繁殖用の家畜に関して

1 馬の品種

優等賞 アイ・ド・スラド氏に 審査員の会員としてコンクールで除外

1等賞, 150フラン 銀メダルと共にオルフラスイエールにおけるマニユエル所有者

2等賞, 80フラン 銅メダル 同上

1 牛の品種

コンクールで示された動物は、賞に値すると判断されなかった

2 豚の品種

1等賞, 60フラン 銅メダル 同上

2等賞 40フラン 銅メダル ミレ・フィス氏 既に明記された

3 羊の品種

1等賞, 50フラン 銅メダル パルカイ・メスレライのルガーヴ氏に

2等賞, 50フラン 銅メダル サント・アヌのギローム氏に

子羊の賞金, 30フラン 銅メダル ミレ・フィス氏 既に明記された

V 養蚕に関して

1等賞, 40 フラン 銀メダル ロッシュのマドモアゼルペシュラー

2等賞 25 フラン ブーブレのピロー・オベール氏
ブーブレのガディアン・ドピュイ氏に

3等賞 20 フラン ブーブレのティルヴェイロー氏
20 フラン ブーブレのオベール・マルタン氏
20 フラン ド・プレシス・レ・トゥールのマダムデクローに

4等賞 銅メダル ヴェレのシャルティエ氏に

VI 指導 (1)

農地の開発に関しての、長い滞在および貢献について (農場の男性へ)

1等賞 60 フラン 銅メダル ピュスイニイのジャン・ファヴロー
42年の奉仕に対して
60 フラン 銅メダル クレレのアンドル・ゲーロン
27年の奉仕に対して

2等賞 40 フラン 銅メダル ヴェイニユのジャン・ラゲノー

3等賞 50 フラン 銅メダル モネのミッシェル・ブリオン
18年の奉仕に対して

VII 指導 (2)

農地の開発に関しての、長い滞在および貢献について (農場の女性へ)

1等賞 50 フラン 銅メダル サン・テティエンヌのオポトユヌ・シルヴェリ
23年の奉仕に対して

2等賞 40 フラン 銅メダル ベルトゥネのマリー・ベルジェ
19年の奉仕に対して

3等賞 30 フラン 銅メダル ド・シュミル・シュル・デムのマリー・フランソワ・フロ
ント
14年の奉仕に対して

30 フラン 銅メダル ド・フォンデットウのフランソワ・アデリーヌ
14年の奉仕に対して

VIII 教育と木のサイズ

40 フラン 銅メダル シュヴリエールにおけるジャン・ピコー、庭師

IX トゥーレーヌに関する実践的な農場の問題についての概要

名誉のメダル マダム・コラ・ミレ氏に

それぞれの受賞者がどのような人物であったかは、一部を除いてはほとんどわかっていない。ただし、ほぼこれまで述べてきた開墾や人材育成についての褒賞のなかで VI, VII でみられるように長く貢献したと思われる人物がそれによって褒賞されたこと、また、これまでほとんど触れられていなかった養蚕などの産業についても褒賞が与えられていたことなどがうかがえる。また、全体を通してこの褒賞は、成果というよりも貢献や努力に対して与えられているのではないかということが想定できる。

こういったコンクールでは、農業の実践について正当に評価することを目的としており、賞を与えていた。そこには、賞に値する人もいれば、そうでない人もいた。

最も良い農業実践をした者に褒賞を与える事が、農業者に関心を掻き立て、やる気を与えるということになると考えられていた。

18世紀においては実際、協会の活動は数年で目覚ましい効果が見られなかった。アーサー・ヤングは、農業協회를不合理だとしていた。彼は、上記のようにコンクールをして、賞を授与しても、実際の農民たちは字が読めないと指摘していた。19世紀半ばの当時の識字率は、男性、約50%、女性、約30%位だった。そういう事実もあったが、人材育成のために奨励していた。

パリ国際農業サロンも、品評会で競わせ、賞を授与している。その意味で、この活力を与えるシステムとその思想は、連綿と今日のフランス農業に続いているといえる。

おわりに

本稿は、はじめに述べたように、農業協会の役割と意義の一環を示すことを目的としてきた。革命期に農業協会はいったん中断したが、アンシアン・レジーム期の政府の農業

への支援が、税収入を主たる目的としていたとはいえ、また、当時は大きな成果は得られなかったとはいえ、中断後の農業協会へある程度の理念を引き継いでいたのではないかと考えられる。

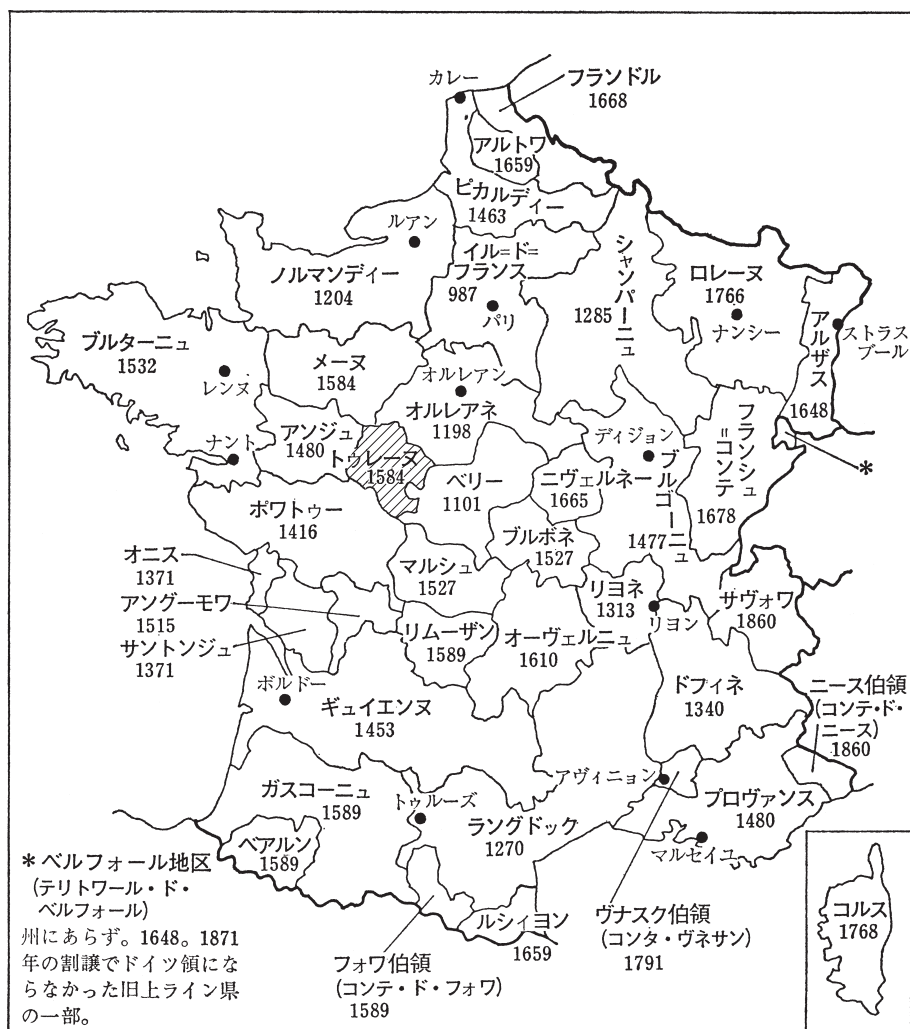
いわゆる「古い見解」ともいわれる通説であるフランス革命による大農場地主からの土地の細分化がフランスを農業国とし、工業化を遅らせたという説に対して、フランスが農業国かつ工業国として発展してきた特殊な形を維持させていた理由は、このような政府による農業政策の影響が、多かれ少なかれあったのではないかとということが考えられる。

本稿で扱った1853年の報告書の分析はごく一部の地域の1年のもので、農業政策のすべてを網羅できたものではない。また、本稿でもあるように、農業技術に関する提案・教育・奨励はすぐに成果がでるものではない。特に木材に関しては植えてから成果が出るまで数十年待たねばならない。ここで明記されているものはほとんどがあくまで提案・もしくは奨励策であり、理想的な結果がでることは保証されていない。農業とは基本的にほんの少しの気温の変化や天候不順により思ったような結果は出ないものである。しかしそのような中でも、改良の努力は不断に続けられてきた。

この分析はごく一部のものであるが、農業協会会員がこのような細かい分析を続けてきたこと、また、地主かつ弁護士であった提案者の一人（ベルトン）が、実際に耕作にも携わりつつ、提案をおこなったことなどをうかがうことができた。また、18世紀からその前身はあったとはいえ、基本的に身分制社会の中では代々直接受け継がれてきたであろう農業技術について、学校を設立するということは、やはり19世紀における農業奨励の特徴であると考えられる。

また、19世紀末から現在に至るまで、フランス政府によるコンクールといわれる褒賞制度は非常に盛んなままであるといえる。特に本稿で題材とした北フランスは、地中海地域やより北部のイギリス・ドイツと比較して、比較的気温・土壌などに恵まれていると考えられている。しかし、アンシアン・レジーム期には農業が恵まれていなかったことを考えると、必ずしもそれだけの理由ではないように考えられる。19世紀から現在にかけての農業国としての地位の確立には、農民の努力ももちろんであるが、政府や知識人の支援および細かい努力の積み重ねがあったといえるのではないか。

地図1 トゥーレーヌ地方



出展：アーサー・ヤング著、宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局、1983年、404ページより筆者加工。本地図はアーサー・ヤングの旅行時のものであるため1789年前後のものであるが、19世紀半ばのアンドル＝エ＝ロワール県も本地図で示したトゥーレーヌ地方とほぼ同じ領域である。

注

- 1 佐藤崇章「18 世紀半ばにおけるフランス農業の発展－農業協会の貢献－」『明海大学大学院経済学研究科 経済学研究科紀要』第 5 号 2015 年, 33 ページ。
- 2 アーサー・ヤング著, 宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局, 1983 年。
- 3 Leen Van Molle and Yves Sergers [dir.], *The Agro-Food Market: Production, Distribution and Consumption*, Turnhout (Belgium), 2013, p. 165.
- 4 柴田三千雄他編, 『世界歴史体系フランス史 2 16 世紀～19 世紀なかば』山川出版社, 1996 年, 437 ページ。
- 5 Molle and Serges (2013), p. 169.
- 6 1844 年からのボワシーの家畜品評会については, 佐藤崇章『パリ国際農業サロンの歴史－1778～2015 年－』オーエムエス出版, 2016 年, 28～59 ページを参照。
- 7 デヴィッド・グリッグ著, 山本正三他訳『西洋農業の変貌』, 二宮書店, 1998 年。
- 8 本稿においては, はじめに, 第一章, おわりにを尾崎が担当し, 第二章の史料紹介部分を佐藤が担当している。もちろん, 内容に関しては相互に意見を出し合い調整したため, 全体的に共通の責任をもっている。
- 9 Meneau, M, *Histoire de l'agriculture en Touraine Des origins à nos jours*, Éditions l'Araignée 2000.
- 10 吉田清一「19 世紀初頭のフランスにおける農業問題」関西大学『経済論集』第 13 巻, 第 1, 2 号。
- 11 湯村武人「19 世紀フランスにおけるロワール＝エ＝シェール県農村の動向」『経済学研究』43 (2), pp. 1-22, 1977-08-10. 九州大学経済学, 「19 世紀ヨーロッパ農村における大規模経営の減少と中規模経営の増加について：フランスを中心に」『経済学研究』45 (4/6), pp. 23-39, 1980-07-10. 九州大学経済学会。
- 12 Minangoin, Quelques faits intéressants de l'agriculture en Touraine, Rapport présenté a la société d'agriculture d'Indre-et-Loire, au nom de la commission d'examen pour les primes de 1853.
- 13 Bernard Chevalier [dir.], *Histoire de Tours*, Toulouse, Privat, p. 272.
- 14 Meneau, M (2000), p. 277. 政治暴動の原因としては工業化に由来すると市民のプロレタリアート化によるものが主であるといわれているが, その背景には当然のことながら周辺農村の農業危機が影響している。
- 15 Meneau, M (2000).
- 16 Meneau, M (2000).
- 17 柴田三千雄他編, (1996), 437 ページ。
- 18 不毛な土地を肥沃にするのは, 植林だった。そこで, 焼き畑があった。焼き畑は, 最初に焼いた時には, 土地の肥沃度はいいが, 20 年, 30 年経つと, 不毛になってしまうと言われる。そこで, 松とコナラとマカラス麦の輪作で, 肥沃度を保ちながら農業を続けている。
- 19 薄い表土と砂でできており, 耕作や牧畜には適さない平坦地の荒地のこと。
- 20 同様の事を言及している。佐藤崇章著『19 世紀前半ヨーロッパ畜産事情とフランスにおける農事品評会 (comice agricole) についての若干資料の研究』明海大学大学院経済学研究科経済学研究科紀要 第 7 号 201811 月, 47 ページ。
- 21 18 世紀パリの度量衡においては, 1 ピエ=32.5 cm。
- 22 獣医学の基礎知識を学ぶこともしていた。
- 23 18 世紀の内容であるが, 例えば, 農業協会の実践で, 乳牛にリンゴの葉を与えると血尿が出たが, イラクサの乾燥したものを煮立たせて, 雌牛に与えると素晴らしい質の大容量の牛乳を出したと言われる佐藤崇章著「18 世紀半ばにおけるフランス農業の発展－農業協会の貢献－」『明海大学大学院経

経済学研究科 経済学研究科紀要』第5号 2015年, 42ページ。

参考文献

史料

- ・ Minangoin, Quelques faits intéressants de l'agriculture en Touraine, Rapport présenté a la société d'agriculture d'Indre-et-Loire, au nom de la commission d'examen pour les primes de 1853.
- ・ Minangoin, Rapport présenté a la société d'agriculture d'Indre-et-Loire, au nom de la commission d'examen pour les primes de 1854.

欧語文献

- ・ Carré de Busserolle (J. -X.), *Dictionnaire géographique, historique et biographique d'Indre-et-Loire et de l'ancienne province de Touraine*, Tours, 1878 (réimpression 1966), 3 vol.
- ・ Chevalier, B, [dir] *Histoire de Tours*, 1985.
- ・ Chevalier, C, L'Abbé, *Tableau séculaire de la Société d'agriculture de Tours 1761-1861*, 1861.
- ・ Croubois, C, [dir] *L'Indre-et-Loire des origines à nos jours*, Saint-Jean-d'Angély, 1982.
- ・ Dupas, L, *Le Bureau d'agriculture du Mans et les premiers vétérinaires du Maine (1761-1780)*, 1908.
- ・ Gentil, A, *Notice sur le bureau d'Agriculture du Mans*, 1927-1928.
- ・ Guillin, R, Regnard, P, *Analyses agricoles: terres, engrais, fourrages, produits des industries agricoles*, 1926.
- ・ Justin, E, *Les sociétés royales d'agriculture au X^{III}^e siècle*, 1935.
- ・ Kjeldsen-Kragh, Søren, *The Role of agriculture in Economic Development*, 2007.
- ・ Labiche, E, *Les sociétés d'agriculture au X^{III}^e siècle*. 1908. [thèse Droit, Paris]
- ・ Leen Van Molle and Yves Sergers, [dir], *The Agro-Food Market: Production, Distribution and Consumption*, Turnhout (Belgium), 2013.
- ・ Leveel, P, *Histoire de la Touraine*, Paris, 1956.
- ・ Leveel, P, *Histoire de la Touraine et de l'Indre-et-Loire* Chambray-les-Tours, 1988.
- ・ Meneau, M, *Histoire de l'agriculture en Touraine Des origines à nos jours*, Éditions l'Araignée 2000.
- ・ Passy, L, *Histoire de la société national d'agriculture de France*, 1912.
- ・ Planquaert P & Mathieu J, 《Évolution probable des systèmes fourragers en France》*Fourrages*, 72. 1977.
- ・ Vanderpooten, M, *3000 ans de Révolution agricole Techniques et pratiques agricoles de l'Antiquité à la fin du X^{IX}^e siècle*, 2012.

邦語文献

- ・ アーサー・ヤング著, 宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局, 1983年。
- ・ 安達正勝『図解雑学 フランス革命 ヴェルサイユ落日からナポレオン配流まで』ナツメ社, 2011年。
- ・ 佐藤崇章「18世紀半ばにおけるフランス農業の発展－農業協会の貢献－」『明海大学大学院経済学研究科 経済学研究科紀要』第5号, 2015年。
- ・ デヴィッド・グリッグ著, 山本正三他訳『西洋農業の変貌』, 二宮書店, 1998年。
- ・ 湯村武人「19世紀フランスにおけるロワール＝エ＝シェル県農村の動向」『経済学研究』43(2),

pp. 1-22, 1977-08-10. 九州大学経済学, 「19 世紀ヨーロッパ農村における大規模経営の減少と中規模経営の増加について：フランスを中心に」『経済学研究』45 (4/6), 23~39 ページ, 1980 年 7 月, 九州大学経済学会。

